【16】

氏　名（本籍）	小早川（こばやかわ）　真由美（まゆみ）（愛 知 県）
学 位 の 種 類	博　　士（言 語 学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　6292　号
学位授与年月日	平成 24 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**A Comparative Analysis of Writing Tasks in Japanese High School English Textbooks** （高等学校英語教科書における「書くこと」の課題比較分析）

主　　査	筑波大学教授		久保田　　章
副　　査	筑波大学教授		磐　崎　弘　貞
副　　査	筑波大学教授	Ed.D.（教育学）	平　井　明　代
副　　査	千葉大学大学院 教育学研究科教授	博士（文学）	大　井　恭　子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、日本の高等学校の英語Ⅰ、Ⅱ、ライティングの検定教科書の作文課題を比較分析し、教科書の課題の実態や問題点を明らかにするとともに、教科書における効果的な作文課題の配列様式について実証的に検討し、今後の教科書作成や教材開発のための指針を探ることである。

本論文は教科書分析に関する 4 つの記述的研究と、英作文指導におけるプレ作文課題の効果についての 2 つの実験的研究で構成されている。教科書分析では、作文課題を「制限作文」、「誘導作文」、「和文英訳」、「自由英作文」の 4 つに大別し、それらをさらに 14 種類の活動に下位分類したものを基準として分析を実施した。

教科書分析 1 では、英語Ⅰ、Ⅱ、ライティングの科目毎に 3 科目 5 種類、計 15 冊の教科書間で 14 種類の課題（活動）の出現状況に異同があるかどうか横断的に比較検証し、教科書分析 2 では、同様に 15 冊の教科書について、教科書会社毎に英語Ⅰ、Ⅱ、ライティングのシリーズで出現状況に異同があるかどうかを縦断的に比較検証した。教科書分析 3 では、ライティングの教科書 23 冊を取り上げ、制限作文や誘導作文等の 4 つの大きな課題のタイプについて、各課題が実際にどのように教科書中に設定されているか検討した。その結果、英語ⅠとⅡの教科書では、制限作文と特定のタイプの和文英訳が有意に多く設定されており、ライティングの教科書では、制限作文重視の教科書と和文英訳重視の教科書に大きく 2 分されることが判明した。教科書分析 4 では、実践的コミュニケーション能力の養成という観点から、現行の学習指導要領における「書くこと（ライティング）」の記載事項が、どのように 23 冊の教科書において具現化されているか調査を行った。その結果、学習指導要領の複数の記述内容がライティング課題として教科書に設定されていないことが確認された。

さらにライティング教科書の分析に基づき、実際に教科書の中で出現頻度の高い誘導作文、和文英訳、アウトライン作成の 3 つをプレ作文課題として取り上げ、それらの自由英作文に対する効果について、61 名の高校生（専門学校生）を対象に 2 つの実験的調査を実施した。調査 1 と調査 2 では生徒にとって「親密度」の異なる作文のトピックを用い、それぞれの英作文を作文の分析的評価尺度を用いて評価したところ、調査

1では和文英訳とアウトライン作成にプレ作文の効果が見られたが、調査2ではプレ作文の有意な効果は見られなかった。このことから、トピックによってプレ作文の有効性が異なる可能性を示唆している。

以上の研究成果に基づき、効果的な作文指導を行うためには、制限作文や文単位の和文英訳だけでなく、教科書自体に自由英作文の課題をより多く設定する必要性と、その作文を書き直したり、読み手を想定して書く活動などと連携して指導する必要性、さらには和文英訳やアウトライン作成などを利用した効果的な作文課題の配列の必要性等について提言している。

審査の結果の要旨

教科書の重要性に比して、学術的な教科書の分析研究が立ち遅れていることは、日本の英語教育において大きな問題のひとつである。本論文は、そのような問題意識に基づいて行われた、教科書の作文課題（タスク）についての詳細な実証的研究である。本論文の成果として、(1) 作文課題のタイプ別、種類別の出現頻度を基準とする量的な観点と、作文課題の機能や関連能力を基準とする質的な観点の2つを導入した点、(2) 英語I、II、ライティング計15冊の教科書間の横断的分析と縦断的分析の両方を実施した点、(3) 23種類のライティング教科書の質的分析を行い、作文課題の設定に関する教科書の具体的な問題点を洗い出した点、(4) 作文課題の分析に留まらず、それによって導き出された問題点から、プレ作文活動の作文に対する効果について発展的な実験的研究を行っている点など、いずれも本研究の特長として評価に値する。さらには、クラスター分析やコレスポンデンス分析のような統計手法を用いて教科書の特徴や教科書間の関係をより明確に検証した点も、独自の成果として高く評価できる。

一方で、もう少し詳しい説明が必要と考えられる箇所も見受けられる。例えば、ライティング教科書のレベル（難易）区分については、課題数や課題の内容等に関する考察結果だけでなく、その手順も表などで示してあれば、よりわかりやすい記述になったと思われる。また、プレ作文課題の効果に関する実験的研究結果の解釈についても、前半の誘導作文の有効性の議論とより深く関連付けることができたならば、一層説得力のある議論が展開できたであろう。

以上のような課題はあるものの、本論文は教材論の枠組みで行われた大規模で着実な実証的研究であり、今後の当該分野の研究に大きく貢献するものであると言える。

平成24年6月1日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。